

全自者協ニュース

- ・全自者協ニュース/第14号/1999年(平成11年)8月20日
- ・発行所=全国自閉症者施設協議会・事務局 ☎ 0593-94-1595
- ・発行人=石丸晃子 ・編集人=川相智史

当事者本位について思うこと

わたげ 小林 信 篤

最近よく「当事者本位のサービス」という言葉が耳にする。今、なぜ当事者本位ということが改めて言われているのだろうか。このことは裏を返せば、これまでのサービスの在り方が利用者本位ではなかったことを示している。であるとすれば誰本位であったのだろうか。

今日まで福祉や教育のように、人を対象とする専門的な関わりにおける思想、倫理観として「パターナリズム」というものがある。温情(家族)主義、干渉主義等と訳されており、いわゆるギリシア時代のヒポクラテスの医療倫理がその基礎となっている。例えば、「何もできないかわいそうなこの人たちが私たちが守らなければ、支えていかなければいけない。」という温情的意識である。それは反面、「こうするとこの人は不幸になることが目に見えているのだから」というように、人の人生に対して恩着せがましく言って、それを愛情ととらえていくといった側面ももっている。

こうした保護的な側面と、いわゆる最低基準によって職員定数が決められる等、サービスそのものが量的に規制され、その結果として利用者を集団として保護し、管理するという施設の構造とが相まって「当事者本位」の妨げとなっている。このことが結果的に「提供者本位」へとサービスの本質をすり替えた原因となっているとは考えられないだろうか。

パターナリズムからの脱却は、福祉関係者の今までの感情からいえば、「それがなかったら、福祉は成り立たないよ!」というように受け入れ難いものである。しかし、人の人生に関して大きなお節介、あるいはそれ以上の関与をしている、拘束をしていることの実を率直に認めていく必要があるのではないだろうか。

また、当事者の側がパターナリズムからの脱却を拒否する可能性もある。例えば「前はおんぶに抱っこだったのに、今は何もしてくれない。」というようにである。しかし、そうした時に「いつまでもおんぶではなくて、歩ける人は自分の足で歩きましょう。」と言えることが私たちの本来の役割ではないかといえると思うがどうであろうか。

私たち人間は「暖かい布団」と「3度のご飯」と「命の安全」と生存だけを保障してもらっても決して満足しきれない存在である。例えば、買い物をしたい、デートをしたい、映画を見たい、お酒を飲みたい、お金を稼ぎたいというように、いろいろな人間としての生活権についての欲求を抱えている。このことは、欲求の内容や量に違いがあっても、障害を伴っているか否か、自閉症かどうかという問題ではないと私は考えている。つまり、パターナリズムはどうしても弱者救済の考え方が根元にあるため生存権に目が向けられやすく、その結果、施設内処遇に終始する傾向が見られた。しかし、誰もがもう生存権の保障だけでは十分に満足はできない。これからは生活権についてどう保障していくのかということが大切であり、それは施設という枠組みの中での取り組みだけでは不十分であろうことは容易に想像できる。今後、施設や家庭を含めた地域の中でどのように生活権を保障していくのかということが、今後の施設の課題となっていくのではないだろうか。

そして私たち自身も、本当に彼らに生活権を保障し、かつ自立に伴って派生してくる当事者の選択の自由や自己決定(責任)等を含むエンパワメントの構築を支える力量があるのかを真剣に考えなければならない時期にきている。

平成十一年度 総会報告

全国自閉症者施設協議会の平成十一年度総会は、去る五月三十一日午後一～五時、東京都飯田橋のシニアワーク東京で開催された。参加したのは三十施設で、議決に必要な正会員の過半数を越えている。

第一部では、兵庫県・あかりの家の三原憲二氏が議長に選出されて、議事が進行した。平成十年度事業報告および決算報告、規約改正、平成十一年度事業計画および予算、第十三回研究大会について、いずれも原案どおり可決された。

十年度事業報告の中には、『自閉症成人施設の労働(作業)への取り組みに関する調査(1997)』報告書の発行、強度行動障害事業等に関して厚生省や日本自閉症協会と協議した内容が報告された。

規約が改正されたのは、賛助会員を準会員と分け、賛助会員は本協議会の財政援助のみを行う団体および個人とした点である。このように準会員が新設され、会費年額を団体一〇、〇〇〇円、個人五、〇〇〇円と定めた。なおこの改正は本年五月三十一日から施行される。

る。

平成十一年度事業計画から活動内容を概観すると、行政機関および諸団体との情報交換や陳情活動、第十三回大会の開催と第十四回大会の企画、会員施設名簿の発行、会報の発行(年二回)、調査研究活動などがあげられる。

今年度の調査研究活動は、自閉症と精神遅滞の障害の違いについて、処遇システムの面から明らかにすることをテーマにした。この最終目的は、自閉症を今後の福祉構造に組み入れてもらえよう働きかけていくことにある。調査研究委員は、北海道・星が丘寮の寺尾孝士氏、東京都・子どもの生活研究所めばえ学園の川相智史氏、三重県・あさけ学園の近藤裕彦氏の三名で構成され、テーマの性質上、進行に応じて理事会とリンクしていく旨が確認された。

第十三回大会の開催については、主管施設である神奈川県・東やまた工房の関水実氏から開催要項案が説明され、了解された。第十三回大会は本年十一月十八～十九日の二日間にわたり、横浜市のホテ

ルコスモ横浜で開催予定である。併せて、次の第十四回大会は大分県・めぶき園が主管施設となり、九州・山口ブロック五施設で担当することに決定した。

休憩をはさみ、第二部では新会員施設の紹介に続いて、各施設間で活発な情報交換が行われた。またこれに先立ち、石井副会長から中央の施策や審議会の動向などについて情勢報告がなされた。

最近一年の新会員施設は、すでに『全自者協ニュース』第十二、十三号(2008)の紙面で紹介した四施設に加えて、岩手県・虹の家(本年四月開所)が正会員として加盟している。さらに新しく準会員となった京都府・ワークシヨップ北山からも出席があり、一言挨拶をいただいた。

次に調査研究委員会より、活動状況について報告された。現在は予備的調査の段階にあり、前記したテーマに沿って、理事施設からの「一日の生活の流れ」を一覧表に表したデータを整理している。ここで得られた所見に基づいて調査項目を策定し、会員施設全体の調査に拡大していく予定である。自閉症児(者)の処遇困難性に関して、①個別化された処遇プロゲ

ラムの必要性、②地域生活やフォローアップへの特別な配慮、③自閉性障害の理解の啓発などがキーワードと考えている。

そして残りの時間ほとんどを情報交換に費した。今回は特にテーマ設定や話題提供を行わず、自由な討論に終始した。

この中で多くを占めたのは、強度行動障害事業に関する内容である。とりわけ、平成十年より加算事業へ移行したことに伴って、本協議会としてどのように整理し、対応していくのかが大きな焦点となった。措置費に組み込まれ、事業が立ち上げやすくなったため、自閉症加算という意味からも積極的にアピールすべきことが採択された。厚生省との協議はすでに終えており、都道府県に対して、実際に処遇の大変困難な事例をあげたり、これまでの重度棟などにおける処遇の成果をどんどん出していく必要があるのではないかと。さらに、東京都が導入するオンブズマンの制度や、自閉症の判定基準作成に関しても情報が提供された。

(全自者協事務局)

対談 須田初枝／石井哲夫

この二十年親が発起人になり全国にたくさん自閉症成人施設ができました。須田さんはその先頭に立って自閉症協会をひっぱりこられました。今回は自閉症成人施設に寄せる想い、自閉症の方の将来への想いをかたっていたきました。

石井 自閉症の親が作った施設が全国にたくさんあるわけですが、まず伺いたいことは、親が施設に子どもを預けると預けっぱなしになってしまふことがあるのではないですか。期限を決めて返したほうがよいという意見もあります。しかし、今の制度は一旦退園するとなかなか再入所できないという現実があります。この実態をどう思われますか。

人間として生きていくために
須田 私たちが施設作りを始めて二十数年になり、親が発起人になって作った施設は全国に三十ありますが、なぜ施設を作ったかといいますと大半の親は親亡き後を心配して作ったわけです。私の施設も例外ではありませんが、私の施設はそうでないことを打ち出したのです。

なぜかと言いますと、自閉症の人たちが人間として生きていくに

はどうしたらよいかと考えたわけです。特に義務教育後ですね。それを模索していく過程で利用者が自立していく施設を作りたいと思っただけです。そのためには親が子捨てをするような施設にしたい。そのため週末帰宅する施設にしました。一週間に一度家庭に帰れば、自宅には本人の座るべきところがあって、家族の一員であることが自覚できる。こういったことを家庭でなくしてはならないと思いました。なくすような人は施設から出ていただきますとさえ言いましたし、今も言い続けています。それでも、親も年取ってきますとまた施設を一生の場と考え直すということが出てきます。措置をきることへの不安もあり、自立できそうな人をも退所させないということが起こってきます。

私自身親ですから親の気持ちはよく分かりますが、施設の立場からしますとこのままでは「人間ら

しくない」と思うわけです。人間の幸せは環境の整った、喜怒哀楽のある中で生活だと思えますし、今はそれを行う時期にきています。親ができないなら法人がどうしたら彼らの一生をささえていけるか考えるわけですが、保護するだけではなく人間として生きるためには、その子の能力をいっばい出させて、その子が喜んで働き、働いてお金をもらったら喜ぶというような生活にもって行ってあげたいと考えたとき、自ずと法人はいろいろな事業を展開していかねければなりません。



それから自分のお子さんを施設から出していかない親御さんにごう分かってもらうか苦労しましたが、二十名定員の通所授産施設を作って、施設からそこに移った最重度の人たちの生活がとて人間らしくなりました。個室の生活で変わっていく。そういうところに魅力を感じ、自分の子も施設から出したいという親が出てきました。子どもたちが変わっていく姿を見せることによって、人間らしい生き方を目指す施設のあり方を見直し始めてくるわけです。

しかし、義務教育終了後や、思春期に荒れてどうにもならないケースというのがあります。親は愛情はあるのだが支えきれなくなる。その時には親から離れて、違った冷静な目で見て、直すべきところは直す、また、いい部分、伸びる部分を見つけ、療育の中に取り入れてくれる施設を望んでいます。それが本来の専門施設です。

親の作った施設もそれをめざしています。そのままでいるには長い歴史といろいろな事業展開のなかで子どもが変化することを見せないとなかなかできないと思います。

専門性と言うことを考えるとき、

全自者協という自閉症の専門施設がもっと議論を重ね、実践と経験の中から専門性を培ってほしいと思います。

ただ、施設長の考え方がいろいろ異なるので、施設長のあり方というのが大切ですね。

常に勉強し続ける態度が必要ですし、文献からではなく現場から学ぶ、利用者の顔をみて学ぶということが施設長には必要だと思えます。施設長の心の在りようが指導員の心に反映し、またそれが子どもや親に返ってきます。

障害者福祉と自閉症

石井 戦後、知的障害者福祉法が制定されかなりの年月がたっているわけですが、知的障害者施設において最近になってノーマライゼーション、社会参加、本人発言とか、自己決定を言いはじめたわけですが、今言いだしたのはそれまでなかったからです。感じていた人は多かったと思いますが、口にせななかった。なぜなら生産が優先する社会であり、障害者も社会に合わせる、社会に近づけることが目標で、できない人はそれなりの幸せを追求するという別個のものとして考えられていた。自閉症の場

合は社会に適応できるとは思われず、社会から疎外されていた人たちであって、まず救済しなければならなかったわけです。そういう状況では、否応なしに子どもに向いて、子どもに近づいて考えていく、子どもとの関わりの中から考えていくという姿勢を取らざる得なかったわけです。このことは親からしっかり受け継がなければならぬことです。施設も利用者の自立支援にあたっては、今までの知的障害者の援助を踏襲して自閉症者をただ社会に入れようとするだけでは駄目なわけです。社会側



の姿勢を変えないで、社会に近づけという援助は駄目だと自覚する必要がある。このことを踏まえて自閉症問題に関わらなくてはならないのに、このところが十分理解されていません。

親が施設を経営することは、親は従来の施設に失望しているということ。このことを自閉症者施設の職員に伝えていくことが大切です。

須田 先生がずっと言われている受容についても誤解されていることがあると思います。受容についても自分なりに考えてきました。親にその子を受け入れる愛情がなくて子どもというものは育てられないと思っていました。私の息子は重度ですが、自立にむけてどう育てていこうか考え、いろいろなことを教え、出来たら誉め、ある時は叱り、現在のような状態になっていることをみると、まず親の努力が一番だと思います。

石井 私たちは自閉症が好きで自閉症の仕事をしているのですが、親は否応なしに関わらざるえないですね。そこで、親には出来ない専門的な援助は任せて欲しいし、

その中で受容という考え方が大切だと主張したのですが、親の方は自分たちだって受容は出来るが、子どもに教えられないことが生ぬるいと言ったわけです。専門家こそきちんと教えることをやってほしいと言いはじめたのです。先日もある教育関係のパンフレットを見ていたところ、教育関係者が今までは「治す」ということをやってきたが、これからは「教える」時代だということが述べられていました。私が危惧しているのは「治す」ということが誤解されていることです。私たちの主張した「治す」というのは、「癒やす」という意味で、今まで歪められていた子どもの気持ちを開放して、落ちつかせ、それから現実に向けさせるというものです。基本は人間として安定して、この世の中を生きていくことです。生きていく過程の中で働くことやその喜びとか、余暇の楽しみがでてくるわけで、人生というものは大変複雑なものです。そこに端的に自分の立場からだけで教育や処遇を割り切る教師や指導員がいるのは問題です。それに親が加担してほしくない。受容という親の気持ちを大事にしてほしいと思います。

第三者としての専門家

須田 すべてをやってあげることが生きがいになっている親がいます。それでは子どもの真の姿が見えてこない。距離をおいて見ると、第三者の意見を受け入れられる姿勢が大切です。特に学校で教師とうまくいった親とうまくいかなかった親とは、子ども本人の状態が随分違ってきます。その時、専門家が間に入ってもらえばこれから育つ子どもは随分違ってくると思います。

お子さんの状態が崩れ、混乱している親というのは、子どもを一時期施設に入れて見直し、それから社会で生活できるように努力していくことが必要だと思います。その意味で、リハビリテーション施設としての自閉症施設は不可欠です。

石井 スクールカウンセラーというのがまさにそうですね。第三者として、生徒と教師の間にはいる。自閉症の場合も、そういう専門家や、そういった施設の存在が必要ですね。ある時期、親は自分の価値観を問い直してみる、そこに専門家が関わるといった具合に。

変化が見えるということ

須田 そこで子どもが変わってくるのを見えるとしたものです。このことを短い期間で行えればいいのですが、こじれてしまうと時間がかかることになる。そこで期限を区切られると困りますね。

石井 期限を区切ることにはそれなりの意味があるのですが、たとえば強度行動障害加算のように3年という期限が区切られる。柔軟性が無いわけです。ケアプランの在りようについても提言していく必要があります。

須田 個々の子どもの発達に合わせようとする必要が有りますね。かつての知的障害者施設ではIQによって可能性が制限されてきました。自閉症の場合は、そうではなく子どもにつきあっていく中で、育てていく中で可能性を見つけていくことが子どもにとって案ですし、親にも理解しやすい。親にとっては発達が見えることが最高なのです。

高機能自閉症の問題

石井 知的障害の発達について意見を出したことがあります。IQ

だけではなく、社会性も大切だということですね。それに呼応してSI-M社会生活能力検査のSQという指数が出たわけです。しかし、いくらIQが高くても社会適応できない高機能自閉症の存在の実態を知らせることと、彼らへの援助を考えていかなければなりません。

須田 高機能自閉症の問題はこれから増えていくと思いますが、持っている能力を社会で通用するような教育とか、援助を考える必要があります。

社会が変わって、どのような障害も受入れ、どのような行動も受け止めてくれるという社会はなかなかならないと思います。

その意味で自閉症の行動障害的なものがどうすれば軽減、解消できるかも重要です。

スパルタで直るものでなく、愛情をかけ、理解しながら、長い時間をかけ、精神的成長を考えていく必要があります。

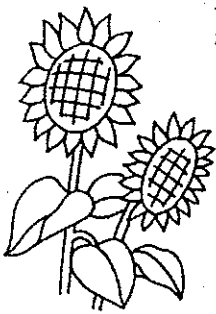
とにかく自閉症を好きになって欲しい。かわいくなって欲しい。かわいくなって、好きになってめり込んで欲しい。ただし、めり込みすぎると見えなくなりますので、あるとき距離を置くということが

大切ですが、それは施設長の仕事になりますね。

自閉症の理解を進める

石井 自閉症と知的障害の距離をなくするために、一番いいのは「自閉症をかわいがって下さい。分かって下さい。おかしところがあっても短期で直そうとせず、その対応の仕方をお互いに公開しながらやっていきましょう。」と提案したいですね。自閉症者援助と知的障害者援助の溝を埋めていきたいものです。

須田 この子たちに人生のあらゆることを経験させたいと思っております。苦しいことばかりで、悲しいことばかりでもなく、楽しいこともいっぱい経験させたいのです。人生は喜怒哀楽ですから。そういった環境を作れない自閉症には、そういった経験の場を作ることをぜひ施設でやってもらいたいですね。



会員施設から

石山センター・

中の島分場開設

平成十一年四月一日に札幌市内の更生施設としては初めての分場『石山センター中の島分場』が利用者十名と職員三名の構成でスタートしました。中の島地下鉄駅から歩いて二分ほどの地域にとけ込んだ場所にあります。今回の分場をスタートする背景には、平成四年から入所部に併設されていた通所部(定員七名)が前年度で限度定員の十九名となり、今後希望者を受け入れることが困難となったこと、また地域でのより安定した生活、活動の場を求める要望などあったこと、また、奇しくも前年に授産施設の分場が更生施設にも拡大されたことが分場設置に取りかかることに繋がりました。建物は、石山センター理事長の経営「なかのしま幼稚園」旧園舎の鉄筋コンクリート三階建て一階部分、約200坪を借り受けたものです。内部の改修工事を行い、訓練室、デイルーム、食堂、医務室、更衣室、職員室を整備して利用しています。

厚田はまなす園

夏祭り

現在、開設し三ヶ月ほどが経過し、ようやく落ち着いてきたところですが、今後は、その立地条件等の利点を利用して活動の場の保障というだけでなく、入所部、または他機関との連携などファミリーサポート等のマネージメント的な機能といった、本人とその家族の地域生活支援を実施する地域の拠点としての役割が求められてくるでしょう。(箭内 宏行)

厚田はまなす園は、日本海に面し、夕陽が水平線に沈んでいくのを間近に眺めることができる素晴らしい処にあります(冬はとても厳しいところですが)。

その厚田はまなす園で七月十一日恒例行事の夏祭りが開催されました。

祭り当日までの準備期間、職員皆大忙し。日常業務も抱え準備を行うため、夜中までかかりいろいろ製作していました。

前日、天気を気にして何度も電

話し、「夕方から雨」・・・何とかもつかない、「雨でしよう」・・・雨天の対応をもっと綿密にしなければ、などと大慌て。

当日の朝は曇り空。これは降るなどという心配ははずれ、開会式まには晴天となりました。

花火とともに開会。地元のYOSAKOIソーランチーム『あつた乱気流』の踊りが始まると、会場全体にもすごい熱気が広がっていきました。パワーあふれる踊りに皆圧倒されました。

ミニ運動会も行われ、デカパン競争に大歓声。

その後、待ちに待った出店が開かれ、焼き鳥・焼きそばなど食べ物には行列ができるほどでした。ヨーヨーつり、輪投げコーナーもにぎわっていました。

午後からは、歌手の小城麻里さんのステージがありました。皆、手拍子をしたり、踊ったりと楽しんでいました。小城さんもステージから降り、皆と踊りながら歌うという大サービス。アニメの歌のリクエストにも、また、アンコールにも応えてくれとても楽しいステージでした。

他にも、コーラ早飲みなどのゲーム大会、育成会メンバーによる育

成太鼓と盛り沢山の内容でした。最後に豪華景品のあたる抽選会があり、歓声があがっていました。花火とともに夏祭りも無事終了。参加者も、利用者、職員を除き約二百名にもなり、大成功の夏祭りでした。(菊池 道雄)

地域の中のみずほ園

開設以来早くも十年が経過しようとしています。交通が不便で、都会的文化資源にめぐまれません、過疎化や高齢化が進み排他的な地域事情の中でどうやって施設生活を定着させるかが私たちの大きな課題でした。

施設は水源地の森林の中にあるため排水は活性炭を通して5mmまで浄化して放流、除草剤は使用せず、付近の住民には迷惑をかけるという約束で生活が始まりました。

夏になると職員と親が懸命に草刈りをし、毎週業者が浄化槽を清掃して月一回水質を市に報告し、利用者の散歩に同行する職員は蛍光緑の帽子をかぶって監督者の存在を地域に示し、通勤の職員車輜は四十km以下を厳守させ、必ず挨拶

抄をし、呑み会に呼ばれば一所懸命飲み、地域の子どもを大事にするようなことをずっとやってきました。

地域の方でも一年目位から施設に歩み寄ってくれ、村祭りの御輿を学園に入れてくれたり、正月には餅つき大会の寄贈をしてくれるようになりました。また、学園に友好的な有志が竹の子刈りをやらせてくれるようになりました。

この歩み寄りが始まった頃に第一回みずほ祭りが実施されました。最初は地域の人が百人もくれぱと思いましたが、二、三百人の人が集まり驚きました。翌年からは地元青年会がみずほ祭りでは産地直送の野菜や米を売り始め、その収益を学園に寄付してくれるようになりました。お客も五百、六百と増え、昨年の第九回みずほ祭りでは九百人以上のお客が集まりました。

いつの間にか、法人の理事二名は民生委員や児童委員の方がやるようになり、理事長も勝浦市の福祉事務所課長や清掃事務所長等を歴任された方となりました。そんなことで毎年のみずほ祭りは市長や福祉事務所長が必ず来訪される地域ぐるみの祭りにな

り、近隣の七つの地区からの支援も受けるようになりました。

次の十年は、こうした地域との関係をさらに育てながら、利用者の地域生活への移行を模索することになると思います。今では五万株の花を育てて牧場、駅、役場、商店街、学校などに植え付けをしたり、地域への訪問販売をしたりしています。これを商売として定着させ、利用者が収入を得られるような方向性を考えるつもりです。もう一つは、利用者や在宅障害者の家庭に対するサービスの提供です。大きな病院が行っているようなオンラインの個人カルテの仕組みを、施設の処遇記録に持ち込み、職員が多面的な情報をカルテに入力して総合化し、評価したり目標を立てたりし、情報検索できるような仕組みを作ります。これで療育を効果的に実施するとともに、家庭からもパスワード入力で自分の子どもの毎日がみられるようにしたいと思います。コンピュータも廉価になってきているので、施設の中でランを作ったり、家庭と結びというようなことができる時代になりました。いろいろ工夫が必要ですが、新卒の情報提供サービスとして開発に着手しよ

うと考えています。(森本 照雄)

あかりの家・

四郷分場と一泊旅行

あかりの家は、昭和六十一年あかりの家開所から十三年目を迎えます。今年度は、四月一日より四郷分場(通所)を開設するに至りました。クリーニング業者から作業の委託を受けて、老人保健施設を利用する人達の衣類を業務用機械で洗濯・乾燥・分類・たたむ作業を行っています。利用者十一名(十八〜二十九歳、男性四名・女性七名)は、各交通機関を自力通勤し、本格的な仕事を目指しています。地域の協力を得て、地域社会での自立と社会参加を目指し、歩み始めました。

親子一泊旅行(十月十八日〜十九日)は、飛行機を利用して東京ディズニーランドに行きます。

開所年からの実施でこれまで様々な名所旧跡巡りを積み重ねてきましたが、すべて観光バス利用でした。公共交通機関の利用、しかも初めての飛行機体験です。職員の意識をひとつにして、この初めての体験を、経験としてきつと次に積み重ねられる旅にしたいで

す。(川崎 圭子)

わたげ・

作業所「ふあず」開設

横須賀たんぼの郷、今年度は四月から三浦市の委託を受けて作業所「ふあず」(定員十名)を開設しました。

三浦海岸に面した保養所だった建物を借りて行っています。

「ふあず」の由来は、英語の「FUZZ」です。「わたげ」という意味の他に「ふわふわしたもの」、「フアジー理論」といった意味があります。自閉症の人たちは、ある意味でストレイトな人たちですが、「多少の誤差は許容する」という「フアジー理論」を様々な関係性の中で構築していけるようになれたらということで、この名にしました。(小林 信篤)

めぶき園・

余暇活動を通して

本年度より、夕食後の余暇活動として、新たにハンドベルを始めました。これで夕食後の余暇活動は火曜日が大鼓、水曜日がハンドベル、木曜日が詩吟の週三回行

うになりました。

余暇活動は全利用者に参加を呼びかけていますが、毎回十五、二十名程度の利用者が自主的に参加しています。和太鼓とハンドベルは職員が担当し、詩吟はボランティアの先生が夜の七時頃から一時間程度指導しています。

当面の目標は秋の「めぶき園まつり」のステージで発表することですが、詩吟の時には、ほとんどの利用者が前に出て独吟するのを楽しみにしています。言葉の出ない人も、みんなの前に出て伴奏に合わせてうなづいて、拍手を受け、とても嬉しそうに見えます。

和太鼓やハンドベルは、交代して希望者全員が参加するようにしていますが、なかなかバチやハンドベルを放そうとしない利用者も見られます。

上手にできなくても、失敗しても、決して叱ったり、怒ったりしないで、拍手したり、握手して励ますように心がけています。

こういう場面を見ていると、自閉症といわれている彼らも、工夫や配慮があれば、結構いろんなことに興味を持ち、目立ちたがりやであると思えてくるのです。

(五十嵐康郎)

平成十年度 自閉症者施設実態調査

全自者協では、自閉症者施設の抱える問題の改善や解決を自指し、定期的な調査研究を行っている。今年度も「自閉症児(者)に必要な援助形態」のテーマのもと調査研究を行っているところである。

また、これとは別に毎年、(財)日本知的障害者愛護協会が実施している全国的障害児・者施設実態調査の控えを全自者協から回収、整理することにより継続的な施設利用者の状況把握を行っている。平成十年度のデータがこの度まとめられた。「平成九年度全国的障害施設実態報告書」(1998)と比較により、自閉症成人施設入所者の特徴をまとめると次のように整理される。

① 歴年齢は二十歳代を中心とした比較的若い年齢層に分布が集中している。

② 知的な障害の程度は最重度および重度な精神遅滞を合併する者が大部分(80%)を占めており、その中でも測定不能(課題への適応困難)が多くなっている。

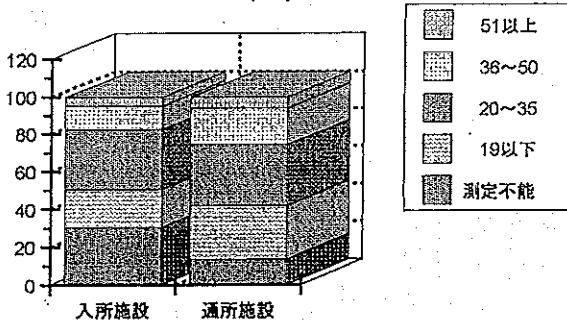
③ 身体障害の合併や健康面での

問題(病弱など)が少なく、日常的な身体面の介護の必要性はあまり高くない。ただし入院による歯科治療の事例に代表されるとおり、治療や静養時の介護困難性も指摘されている。

④ ③の反面、てんかんや重篤な行動傷害の合併などが顕著に認

められる。このため行動面での介護度かなり高く、それに関連して精神科医療との連携は不可欠と考えられる。また、強度行動障害加算対象者は入所施設三六六人(24.4%)、通所施設十七人(9.5%)と高い割合を示している。

IQ(DQ)の分布



介護度の状況(入所)

